

官能殺器
伊藤計劃

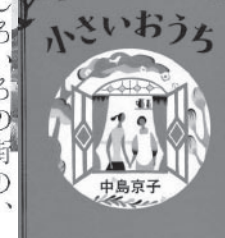
タラチネ・
ドリーム・
メイン
雪舟えま



特別な時間の終わり



赤ヘル
1975



新しい小説はどこにあるのか、という問いはいつだって繰り返される。「早稲田文学」の歴史ひとつをとっても、創刊翌年の一八九二年には早くも「文学者の新題目」という小文が「時分評論」に掲載されているし、続けて一八九三年には「新文壇」の記事、一八九四年には海外の「新文豪」をめぐる連載が始まっている（ちなみにそこで紹介されているのは、トルストイやイブセンといった人たちだ）。一九二二年には島村抱月の教え子・西宮藤朝が「新しい時代のための新しい文芸家」という評を書き、一九四二年には「新しい文学の精神（われららの出発と勝負）」なる一文が掲載される。やや近いところをみても、一九七八年に中島梓（栗本薫）が『《新しい文学》は必要か』を書く一方、三田誠広は連載時評を「新しい書き手はどこにいるか」と名付けて毎月「新しい文学」を探しているのだし、そのころ積極的に日本で紹介された「ヌーヴォー・ロマン」も、名付け自体がそのまま「新しい小説」だった。

結局のところ、「新しい小説」に興味と価値があるという以上に、「新しい」ことに私たちははついついひきつけられがちで、徹頭徹尾「新しさ」に懐疑的なのは、赤瀬川原平「新しいものはもう古い」（一九七八年）くらいしかない。だが／それでは、小説じたいが「新しい」ことから隔たりつつある今日、その問いはどのようにありうるのか。

そのことはおそらく、「新しい小説」を定義する批評の言葉の所在とも無縁ではない。判断する主体の経験や知識に依存しがちな「新しさ」には、温故知新なる故事があるように、過去への視線とみずからの論理への再検討（とその先での再構築）が欠かせない。それらの

ない「新しさ」はしばしば、たんなる無知の別称に留まることになる（だから／むしろ、ただ新しければよい、というものではない）。「新しい」ことに会おうためには、一方の軸足を過去の（ともすれば保守的に映りすらする）歴史の積み重ねに置き、もう一方の軸足をそこから逃れ旅立つてゆく運動に置く、言わば「徹底した不実さ」とでも呼ぶべきものが必要なのであって、一見相反するそれらを繋ぐのは、大小を問わぬ「論理」にはかならない。

ここ十年の社会構造が小説の世界に与えた大きな変化は、小説そのものの読まれる量の低下とは無縁に、「レビュー」や「書評」といったかたちで小説を評する短い言葉が幾倍も世に溢れたことにある。民主主義的な理念から言えば、そのように誰もが自身の価値観なり感想なりを口にするには、もちろん好ましいことだ。一部の人々の嗜好品として自閉的になるよりも、広く人口に膾炙することが「文化」の本望であることも言うまでもない。だが、分量的な制約によってであれ他の理由によってであれ、「論理」ではなく「感想」に留まる限り、そこにはただ個人の経験的な「新しさ」しか見出せない。「新しい小説」のためには「新しい小説」を名指す言葉が必要なのであり、それは成否を問わず、「論じる」ことからしか道は開けてゆかないだろう。

大江健三郎や村上春樹以後の日本文学の現在に、いったい何がありえて、何が可能性として「新しさ」を持ちうるのか。「今と未来を担う作家たち」という、論じる者それ自身が問われるようなこの問いに向き合った六人の書き手が、めいめいのスタイルをもつ小説家を選び出し、「論じる」ことで見えてくるだろう。

「新しい小説」はいつだって繰り返される。「早稲田文学」の歴史ひとつをとっても、創刊翌年の一八九二年には早くも「文学者の新題目」という小文が「時分評論」に掲載されているし、続けて一八九三年には「新文壇」の記事、一八九四年には海外の「新文豪」をめぐる連載が始まっている（ちなみにそこで紹介されているのは、トルストイやイブセンといった人たちだ）。一九二二年には島村抱月の教え子・西宮藤朝が「新しい時代のための新しい文芸家」という評を書き、一九四二年には「新しい文学の精神（われららの出発と勝負）」なる一文が掲載される。やや近いところをみても、一九七八年に中島梓（栗本薫）が『《新しい文学》は必要か』を書く一方、三田誠広は連載時評を「新しい書き手はどこにいるか」と名付けて毎月「新しい文学」を探しているのだし、そのころ積極的に日本で紹介された「ヌーヴォー・ロマン」も、名付け自体がそのまま「新しい小説」だった。

結局のところ、「新しい小説」に興味と価値があるという以上に、「新しい」ことに私たちははついついひきつけられがちで、徹頭徹尾「新しさ」に懐疑的なのは、赤瀬川原平「新しいものはもう古い」（一九七八年）くらいしかない。だが／それでは、小説じたいが「新しい」ことから隔たりつつある今日、その問いはどのようにありうるのか。

そのことはおそらく、「新しい小説」を定義する批評の言葉の所在とも無縁ではない。判断する主体の経験や知識に依存しがちな「新しさ」には、温故知新なる故事があるように、過去への視線とみずからの論理への再検討（とその先での再構築）が欠かせない。それらの

